K-589

戸長里窯跡

1986

まんぎり会

序

もう十年ではきかない昔になっただろうか。調査に出かけた序に，水野　哲さんの工房を訪れたことがある。その折，戸長里の窯跡のことを聞かされ，興味をそそられながら，窯跡の現場に足を延ばした。窯は小樽川に沿う国道から少し登って，東南向きの斜面にあった。思ったよりも急な斜面に，何基かの窯跡がある。帰りしなに，近くの寺院で，これまでの出土品を見せて貰って，ハッとした。これらはいつの時代になるのかナーと。

考えてみると、県内の窯業については，近来，各地域で，窯跡の調査が進められてきた。しかしこれらは，八世紀の窯をトップとする古代の須恵器と瓦当の窯跡である。その後は，ずっと跳んで，近世から近代にかけての民窯である。この間をつなぐ実例が，欠けている。どのようにつなぐか，どのような作品があるか。そう考えると，この戸長里の窯跡の調査が必要なのだと切実に思った。

幸いにして，米沢市附近在住の若い考古学徒の集まり，まんぎり会が主となり，米沢市史編纂委員会の協力を得て，保存を最大の目的とする調査にとりかかってくれた。第１回の調査をこの報告書に纏められたが，出来るだけ多くの人の関心を喚び，遺跡・遺物の保存顕彰に漕ぎつけることが出来るように念ずる次第である。

昭和61年３月

山形県立米沢女子短期大学学長
山形県文化財保護審議会会長
山　形　考　古　学　会　長
柏　倉　亮　吉

例　　言

1．本報告書は，まんぎり会が昭和60年８月１日～同年８月８日に至る延べ８日にわたって，実施した戸長里窯跡の第１次発掘調査報告書である。

2．調査はまんぎり会が，戸長里窯跡の重要性とその性格を把握し，その保存と活用を図ることを目的として実施した学術調査である。

3．調査体制は次の通りである。

調査主体	まんぎり会
調査総括	加藤　稔　（山形県立上山農業高等学校教諭・日本考古学協会委員）
調査担当	水野　哲　（陶芸家）
調査主任	手塚　孝，川崎利夫
調査副主任	菊地政信，佐藤正四郎，村山正市
調査員	月山隆弘，中島正己，鈴木良仁他まんぎり会々員
調査協力	藤田宥宜，藁科孝一，笹原啓二，藁科　武，米沢市教育委員会，米沢市史編纂室，山形県教育委員会，田沢地区公民館（敬称略）
事務局	橋爪　健，菊地政信
調査指導	柏倉亮吉（山形県立米沢女子短期大学学長，山形考古学会会長） 芹沢長介（東北大学名誉教授） 楢崎彰一（名古屋大学教授）

4．本報告書の作成は，水野　哲を中心に，手塚　孝，村山正市両名が補佐し，全体的に加藤　稔が総括した。実測図作成は手塚，村山が行ない，遺物整理等については，まんぎり会々員が補佐し，編集は加藤　稔，佐藤正四郎，菊地政信が担当した。

目　次

序……

例　言……

1）調査に至るまでの経過……1

2）位置と環境……3

3）調査の経過……3

4）歴史的背景……4

5）遺　構……5

①窯体……5

②物原……6

6）遺　物……9

7）まとめ……21

8）あとがきにかえて……24

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図……2

第2図　戸長里窯跡窯体平面図(1)……7

第3図　戸長里窯跡窯体平面図(2)……8

第4図　戸長里窯跡出土遺物実測図(1)……16

第5図　戸長里窯跡出土遺物実測図(2)……17

第6図　戸長里窯跡出土遺物実測図(3)……18

第7図　戸長里窯跡出土遺物実測図(4)……19

第8図　戸長里窯跡出土遺物実測図(5)……20

図　版　目　次

第一図版戸長里窯跡の発掘(1)

第二図版戸長里窯跡の発掘(2)

第三図版戸長里窯跡の発掘(3)

第四図版戸長里窯跡出土陶器(1)

第五図版戸長里窯跡出土陶器(2)

第六図版戸長里窯跡出土陶器(3)

第七図版戸長里窯跡出土陶器(4)

第八図版戸長里窯跡出土陶器(5)

第九図版戸長里窯跡出土陶器(6)

第十図版戸長里窯跡出土陶器(7)

第十一図版戸長里窯跡出土陶器(8)

第十二図版戸長里窯跡出土陶器(9)

第十三図版戸長里窯跡出土窯道具

1）調査に至るまでの経過

昭和47年，萩から米沢に帰り，焼物を初めた頃，考古・縄文をやっていた友人小池一志君より「お前の分野じゃないか」とエブタの完品を見せられ現場に案内してもらった。一帯は土地の人により「カワラケ坂」と呼ばれ，得体の知れない焼物が出ると既に知られていた。

現場は会津喜多方に通じる国道沿いの藁科孝一氏宅すぐ裏手の急斜面であり，畑道の造成等でミョウガ畑脇に匣鉢・焼台等が散乱していた。また一見して，その窯跡が当時通読していた平凡社発行の陶器全集・第四巻「志野」荒川豊蔵著の解説・年田洞窯跡（P12の24図）の写真に似ていると感じその窯体を確認した。その後，土地の藁科氏の御好意による表面採集の結果，擂鉢，古瀬戸風鉄釉小皿等数片を得，それを携えて出光美術館に顧問の故小山富士夫先生をお訪ねした。先生はその擂鉢の櫛目から考察され，「桃山期でしょう」との答を得た。また同美術館の資料室の参考品にとその数片の寄蔵を請われた。

その後，数度の個人による表面採集，また出光美術館の資料や，故尾崎周道先生よりの古瀬戸の本等によりおおよそを知り，より多くを識りたいため49年春の発掘を計画，その予備調査に48年秋，当時尾崎先生の塾仲間である那須野浩，富田昭正，渡辺修一，私で現場を改めて確認，来春の発掘手順を探った。

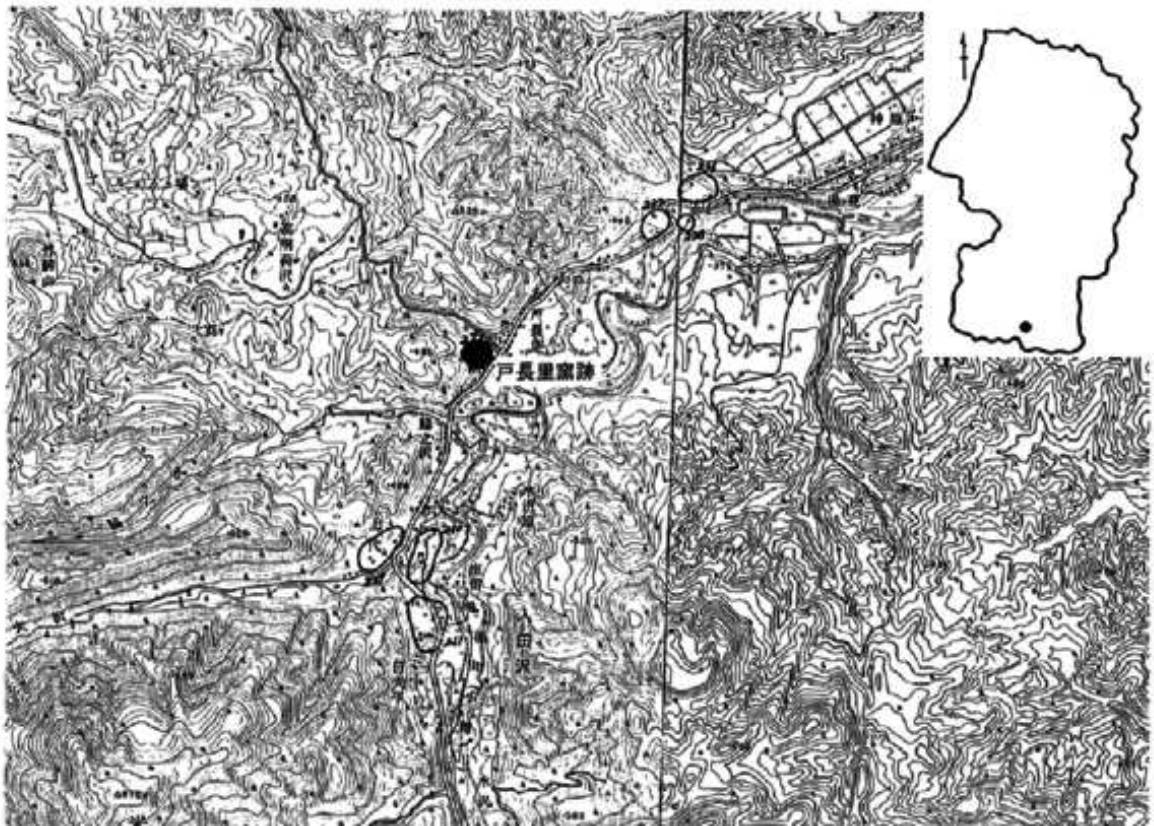
49年春，米沢市上杉博物館，稽照殿学芸員，また歴史家であられる尾崎周道先生，栗野牧道先生の指導の元，当時の尾崎先生の塾生・那須野浩，野村研三，富田昭正，植野明夫，浅間周蔵，小島博，横川昇二，渡辺修一，林久雄，相田芳樹を中心に志藤尚山先生，栗野修一親子，郷野由紀，秋山豊，橋本元助，伊藤康子（現姓山名），佐藤みち（現姓鈴木），また尾崎先生の将来への配慮にと地元三沢西部小学校の生徒達と引率の先生，それと私で午前中のみの表面採集と，ごく僅かの発掘を行った。これも私達が正式の発掘技術や測量技術を持たないため後への配慮である。その結果，小学生徒により天目茶碗の高台が，その他肩衝茶入，タンケ（灯明皿），織部緑釉鉢，その他多種を得られた。午後からは，傍の神社広場で往時を偲び拙作の小井戸写し茶碗で野点ての茶会を催した。菓子は蕗の砂糖菓子，器は菅笠に壊紙をひいたものである。ひきつづき瀬バヤの木の芽田楽焼，山菜の王アイコのニシン煮等で，掘作の朝鮮唐津阿古陀大徳利で酒宴に移った。

49年初夏，春の発掘で得た織部，肩衝茶入，天目茶碗の破片を持ち瀬戸の守山に故加藤唐九郎先生を訪ねたが不在で，三男重高氏に名古屋のホテルに伴なわれ，市内の鳥料理店にてやっと唐九郎先生の御意見をお伺いした。その折の先生の御感想は，江戸初期のものではないか？ものによっては桃山まで遡る事も考えられるとお述べになられた。また，それらのものは大名ではなく，豪商が作らせたのではないかとの御意見でした。

次に，故加藤十右ェ門先生への紹介状を頂いたので訪問したがあいにく御病気で，ご次男の方に赤津だったか天目茶碗の沢山出土している古窯で楢崎先生の発掘現場に案内して頂きたが，あいにく先生は不在だった。現場の学生さん達に意見を伺ったが，"鉛緑釉"には興味を持っているようだったが織部風の銅緑釉や同じく携行した輪高台の天目には感心を示さなかった。

次に，一人で土岐元屋敷窯を見学，歩きながら路傍の土や古窯跡を訪ねつつ，久々利大萱在住の私と同県出身の陶芸家守谷宏氏に至った。翌日近在を色々案内して頂き，笠原の古い雑器類や沢山のぐい呑のコレクションのある参考館に陶器の照合を兼ね見学した。後徳川美術館を見て帰途についた。

前述したように私達が正式の発掘技術を持たないため，意識してこの窯には触れないでいたが，二三の小発掘の報に接し心を痛めていた。また地元の農村文化研究所で知り会った民俗学で愛知大の現教授である佐野賢二さんが心配して，出身校である筑波大の発掘知識のある学生達を紹介してくれるとの事だったが時期や諸状況により，発掘調査までは至らなかった。そのうち川崎先生が私の保管している陶片を写真に収め，米沢文化センターにてその報告会と室町期の窯跡ではないかとの考察なされた報告書をお出しになられた。柏倉亮吉学長・芹沢長介教授，加藤稔先生，それに名古屋大の楢崎彰一教授の御尽力により市教委の発掘主任手塚孝氏とともに今回，地主の藁科孝一氏を始め，地元の方々の御理解と御協力を得，また米沢市教育委員会，米沢市史編纂委員会などの御協力によって，この窯跡を保存・活用し，後世に伝えることを目的として，第一次の調査を実施するに至った。　　（水野　哲）



第1図　遺跡位置図

2）位置と環境

この窯跡は，山形県米沢市大字入田沢字戸長里1651－12番地に所在する。地目は山林・畑地である。海抜413mに立地している。この窯跡の東側を国道121号線が米沢から喜多方へと走る。吾妻連峰大森山・家森山に源を発す鬼面川（小樽川）の流域には，縄文時代から中世にわたる23ヶ所の遺跡が所在する。これらはいずれも河川の左岸の段丘上や山麓に立地し，西側の段丘上に遺跡が所在するという特徴がある。これらの遺跡の多くは，日照に加えて沢水や適した段丘など地理的環境による立地条件に左右されたものでないかと考えられる。周辺には竹駒山（海抜656m）から流れる高明荷沢，脇之沢，白夫沢など陶土を産出する沢が多く分布する。大峠をはじめ，この周辺は陶土を得るに適した場所であったらしく，大峠周辺では，現在も白土の採掘をしている。

河川を挟んで東側の水沢原周辺からは，縄文時代の石器片などが採取され，白夫沢遺跡からは縄文時代前期頃の土器片，石器片が採取されている。白夫沢遺跡の向い側にも座留遺跡という縄文時代の遺跡が分布している。これら田沢地区周辺は，縄文時代を主とする遺跡群が河川の段丘上に立地している。中世の遺跡としては，大師山（海抜803.5m）が，修験道に関係がもたれる霊山と考えられている。窯の所在する一帯を，地元の人々は「カワラケ坂」と呼んでいることから，焼物片などがかなり以前から出土することが知られた様子を物語る。

（村山正市）

3）調査の経過

関係各位の協力を得て，昭和60（1985）年８月１日に調査を開始し，同年８月８日まで真夏の中，実質８日間の調査であった。現地は，地主の藁科氏のご好意によって下草刈が行なわれており，直に調査を開始することができた。

初日から窯体の状況を確認するために，ブルドーザーで削平された地域から上部の焼成室の精査にとりかかる。併行して調査区の設定を行なう。２日から焚口部の確認のためトレンチを設定し調査を行う。３日は窯体の全長を把握するため，準次下へ調査区を拡張し，全長17m程の窯体のプランが確認され，焚口部に袖石と類似する床石を確認する。４日から灰原の状態を把握するため，窯体の北東側にトレンチを設定する。同時に窯全体の掘り下げをし，２度にわたる側壁の修復を確認した。また，焼成室の北側に接定したトレンチの状況とセクションから考え，焼土のばらつきによって計５回の修復が行なわれたことがわかった。４日は，休日のために会員を始め多数の参加を得ることができた。５日から灰原の掘り下げを行い，整理箱にして15箱以上の窯道具等を得た。６日から土層断面図の作成ならびに煙道部の確認作業を行う。煙道部はかなり破壊を受けていることが明確になった。７日：窯体の測量

作業と写真撮影を行い，現地説明会の準備に取りかかる。８日：現地説明会を行ない，地元の方々や研究者，郷土史家など30名が参加を得，午後から埋めもどしを行い，全調査日程を終了した。（手塚　孝）

４）歴史的背景

米沢市南西部の田沢地区は，最上川の上流，鬼面川によって形成された段丘上に立地する。田沢地区は，山形県と福島県を結ぶ主要道に沿った一集落である。戦国期から桃山時代には米沢城・館山城と会津黒川城（のちの若松城）とを結ぶ重要な文化ルートとして位置づけることができる。街道は米沢に発し，小野川街道から館山で分岐し，喜多方街道で大峠を越えるルートである。伊達氏時代には，会津の武将芦名氏などとの主要要害の地とされ，固く守られていたことがあった。それが，戸長里館跡などであったと思われる。

ここで，この地域の支配および若干武将らの茶道のことについて触れておこう。

文治年間(1185－1189)，鎌倉の御家人である大江広元は，中世の置賜地方を拝領。次男時広が地頭として所領を相伝，成島荘ほかの地頭となる。時広以下は長井氏を称し，八代約150年間この周辺を支配することになる。当時の地頭の中には，中央政務に関与しているため地方へ下ることは無かったばあいがある。成島荘を実際に支配したのは，地方土豪の中で地頭代に任ぜられたものがあたった。

長井氏が滅亡すると，伊達郡（現福島県城）を領していた伊達氏が天授６（1380・康暦２）年に長井荘を占領し，高畠城を居城として構え，米沢城を番城とした。伊達氏の置賜支配は約200年である。その中でも伊達植宗は戦国武将としての血が強かった。近隣の最上氏や大崎氏・芦名氏らと合戦し，領地を加増することができた。その後，17代伊達政宗は米沢城で生れ，のち仙台藩65万石の東北の大々名となる。長い間幕府との結びつきが少なく，早くから自立の動きがあったが，一方代々幕府・朝廷との政治的な接近は怠らなかった。したがって，その実力は，東国の雄として重視された。政宗は，天正17（1589）年正月に米沢城で茶会を開いている。その内容は「茶湯客座亭座人数書」に記載されている。翌天正18年６月，豊臣秀吉は，関東の雄小田原の北条氏を攻め，政宗にも参陣を促すが，難色を示したのち参陣している。そのため，奥羽の処分とし，伊達以下６郡が没収され，米沢から岩出山城に移封される。秀吉は，京都妙覚院で天正19（1591）年４月に奥州大名として茶会に招かれている。政宗の置賜支配が終りをとげたのが，この天正19年９月の事である。そののち，会津黒川城へ蒲生氏郷が移封され会津６郡と長井郷を加増される。

蒲生氏の支配はたった７年余であった。蒲生氏は伊勢国松島城12万石時代から千利休の流れをくむ茶道家である。氏郷は文禄２（1592）年，黒川城大改修の際に播磨の瓦師石川久左

衛門他3名に小田，山麓に窯を築かせ，黒瓦を焼せたという記録が残る。やがて戦国の動乱期にさしかかると，瀬戸の陶工らは織田信長の美濃平定により一山越えた美濃国に移住し，茶道全盛の影響を受け，志野・黄瀬戸・織部などを作り出した。一方，文禄・慶長の役（1592－1598）が動機となって，肥前国などで磁器窯が築かれ，瀬戸系の美濃焼は，全盛を終え，次第にさびれてしまう。それが要因となって，伊賀・備前など各地の窯で茶器・茶道具が焼れるようになり，瀬戸系の陶工の一部は，各地に分散して窯を築き開き始めるのである。

5）遺　構　　（村山正市）

①　窯　体

窯は竹駒山656mの東側に485m～450mにわたる緩やかな起伏が開けた台地の南斜面を利用して構築している。窯体全体の残存状況が，ほぼ良好な状態で，破壊されているのは煙道部と焼成室の一部のみであったため，窯の全体的な状況を把握することができた。窯内土層観察用のセクションにも明確な層位関係を見い出すこともできた。

窯体の規模は，全長17m65cm，煙道部現存長1m60cm，焼成室11m40cm，燃焼室4m65cm，床面の平均勾配30度強で，窯の主軸方向はN－70°－Eを示す。

焚口部は思ったよりも残りが良好で，左右対象に安山岩製の自然石を3ヶ別配置している。側壁高20cm，焚口幅50～60cmと狭い。この自然石は長さ10cm，幅5cmの長円形を呈するもので，窯の袖石に類するものと考えられた。残存していたのは，右側の3ヶで他は自然石配置の痕跡が明瞭に認められたものである。袖石と考えるよりは，自然石のレベルがほぼ一定であるために，床面に置いた床石の一部が残ったものと思われる。

燃焼室は床面と昇焔壁が残り，土質層位観察では天井部が崩れ落ちた状況を明確に把握することができた。燃焼室と焚口との小分焔柱は検出できなかった。燃焼室の平均勾配は28度と弱く，ゆるやかな傾斜であった。昇焔壁は数度の補修が行なわれたらしく，張り替えの痕跡がみられる。

焼成室は長さ11m40cm，最大巾1m50cm。床面の傾斜勾配は第1支柱下で30度，第2支柱上面から煙道部にかけて34度と急に勾配がでてくる。焼成室には支柱が2ヶ所に残る。焚口から第1支柱まで280cm，第1支柱から第2支柱まで180cm。支柱は，高さ31cm，幅25～28cmで直方体の粘土塊である。支柱と側壁までの幅は左壁まで1m，右壁まで40cmとやや右よりの位置に置かれていた。第1支柱と第2支柱の間まで非常によく焼けており，焼台も3点出土している。床面や側壁の補修も数回行なわれたと思われ，何ヶ所かにその痕跡がみられる。特に右側壁が弱いらしく，壁厚が10cmと厚い。第2支柱から煙道にかけては，天井部もそのまま残っているようであることから，部分調査にとどめた。第2支柱より上方からは厘鉢が

2点，焼台が3点ほど出土している。底面にはきれいに砂を敷いていた。

煙道は幅15cm程の細いもので，上面が削平された状態であった。深さも木根や削平によって明確でないが20cm程度のものと推測される。

窯の補修は，全体的に2～3回，側壁のみ1回，床面2回行なわれ，部分的には数度補修が行なわれたと考えられる。同一窯での焼成回数は，右側物原の層序や焼土層の混入から推測して約5回ほど行なわれたものと言えよう。

窯の構築形態は，半地下式無階無段の登り窯で，燃焼率の良いように勾配を急にしたものであろう。もしかすると割竹式登り窯とも考えなければならない。

② 物 原

窯跡の前面と側面の斜面には，操業期間中に廃棄された不良製品，窯道具，窯材などが堆積して物原を形成している。

発掘調査前の段階でも，匣鉢を主とする遺物が無数に散乱しており，物原の範囲は広く焚口付近から国道121号線近くまで非常に広大であった。鬼面川からこの窯跡のところを「カワラケ坂」と言い，地名の由来もうなずける。物原の分布も，一定地域を定めて分類した上で廃棄したらしく，窯の右側面には窯道具を主とするものが廃棄され，窯の前面には不良製品を主として廃棄している。

今回の調査によって，物原の堆積層として大きく分け5層が確認された。各層位毎の特徴は以下の通りである。なお，トレンチ調査のため全体的な分布は把握できなかった。

第Ⅰ層 表土

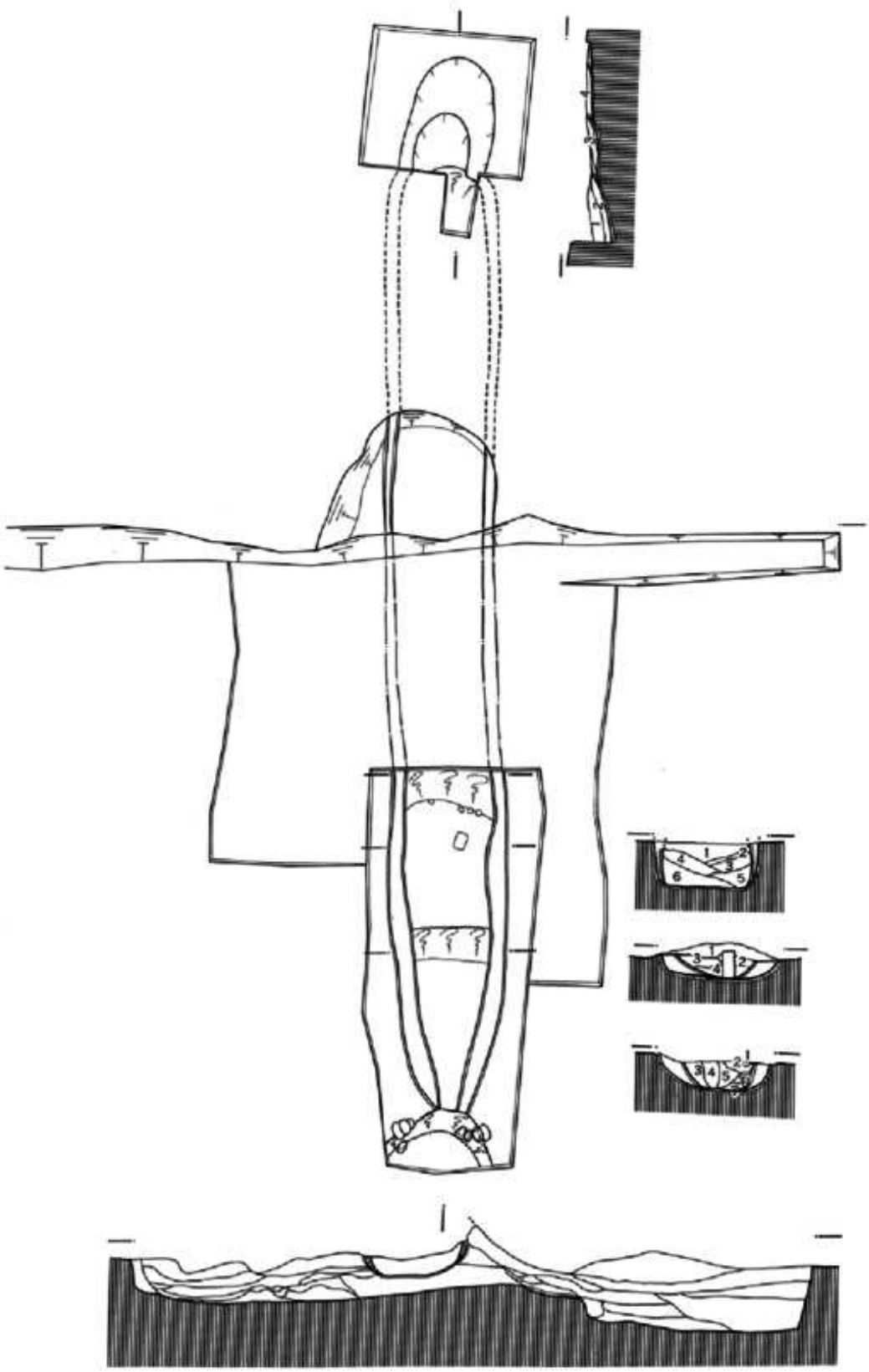
主として腐葉土の堆積層と耕作土とが混合した層で，暗褐色を呈する。焚口部の東に移植された杉の根や植物の根が密にからまっている部分も存在する。厚さ10cm程度で，灰と遺物片を含んでいる。

第Ⅱ層 暗褐色粘質微砂層

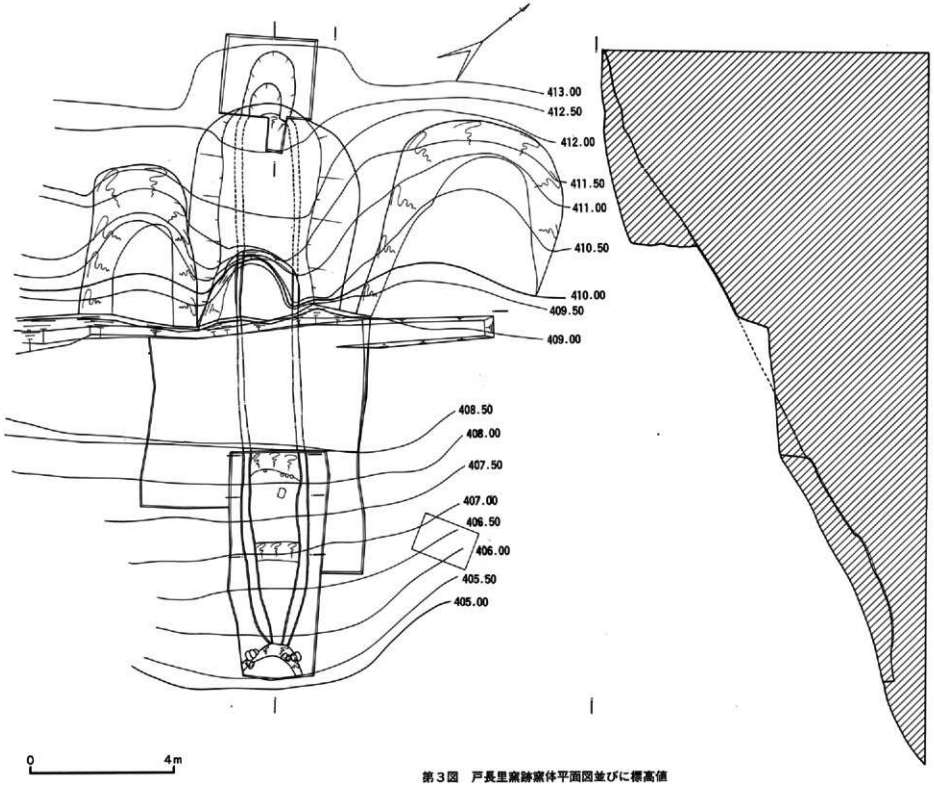
窯跡の東側に広がる層で，包含される遺物は，環状を呈するトチと呼ばれる窯道具と手づくねの焼台が主体である。灰の量も多く混じり，焼土片や窯道具の細片が多く微砂質を帯びている。

第Ⅲ層 暗黄褐色粘質土層

多くの壁片と焼土片および黄褐色の地山層の土，灰などが混じる層である。包含される遺物は，匣鉢，棚板を主とし，若干の環状を呈する窯道具と棒状の窯道具が出土している。微量であるが擂鉢，小皿片なども含む。層厚は，28～30cmと幅がある。



第２図　戸長里窯跡窯体平面図



第３図　戸長里窯跡窯体平面図並びに標高値

第Ⅳ層　暗褐色粘質土層

ほとんど遺物で埋まった層である。遺物は，厘鉢，棚板，環状を呈する窯道具，棒状を呈する窯道具，手づくねの焼台および擂鉢片を包む。層厚は，10～20cmである。

第Ⅴ層　暗褐色粘質土層

微量の地山土と窯道具を含む層で，灰等一さい混入していない。窯構築時の地山層はこの層であったと考えられる。

本窯の物原の特徴として，灰と焼土片などを主に堆積する層と，厘鉢，トチなど窯道具が堆積する層が明確が区別できる。窯前面の灰原には主として不良製品を廃棄していた。そこで廃棄する場合，焼成後の製品の仕分け作業や窯内の清掃などは，窯の右側部分で行なわれたと考えられ，窯体出入口が，存在していた推定地は，窯前面および左側にあったと思われる。廃棄された地域が全部窯体の右側であることも重要なポイントとなろう。（村山正吉）

6）遺　物

戸長里窯での出土遺物は，15～16世紀の美濃（瀬戸系）の流れを汲む，製品，窯道具，窯材等である。

製品は摺鉢，小皿など日常雑器が大半であるが，茶碗，茶入，水指など茶道に関するものも割合に多く出土している。また室町期の穴窯調を残す鉄釉の茶碗，茶入，小皿，摺鉢などと好対照をなす朝鮮唐津，織部緑釉の香炉，鉢類の新技術が混在するのもこの窯の大きな特徴の一つである。それから小は灯明皿から大は非常に大きな水甕と大，小多種多様をこなしているのもその一つである。また素焼土風炉の存在も面白い。

窯材は角支柱，焼台（馬蹄型焼台）小分焔柱など，窯道具は大量に出土する小皿等のための厘鉢，エブタを頭に擂鉢用の"鬼の角"トチン，土ダンゴ，輪トチンなどで，これまでの発掘では製品に比して窯材，窯道具の出土量がおおよそ10倍ぐらいに達すると思われる。

つぎに出土製品の解説を行うが，復元出来るものが少く推定に基づくため疑問も生ずると思いますがその点容赦を願い御指導賜りたい。

1．碗類（第4図－14）〔第4図版－14〕

碗類で出土しているのは，天目茶碗のみで，高台径の割合大きい輪高台のもので，合致する高台から腰までの部分（第4図－14）である。又，縦の掛分で鉄釉，透明釉の掛分の薄手の碗らしきものは今不明である。それに小碗と云えるべきものもあるが，小鉢の類に入れておいた。

尚天目茶碗の釉は錆色不透明の鉄釉である。

2．皿類（第4図－1～8）〔第4図版－1～8〕

皿類は小皿，輪花小皿，灯明皿などである。中型のもので皿と云えるものもあるが鉢の類に入れておいた。古瀬戸風の飴釉がほとんどで，焼不足で黄色のガサガサしたもの（第1図－4）もあるが，焼ければ同様のものと考える。私の古瀬戸風飴釉というのは，灰まさりのため濃淡のムラムラ透明感のある鉄釉を云う。出土量としては擂鉢についで多く，そのほとんどが，径12cm内外の重ね焼のものである。好例として重なったまま出土した（第5図－5_A～5_B）がある。口縁やや外反し，外に二段の轆轤目が走る。高台脇は丸ガンナでひと削りされ，高台内は浅く削ってある。釉薬は全体に施された後，高台内と畳着のみ濡れた布等で拭き取ってある。又器内には三ッ目円堆ピンの跡が丸く残っている。鉄釉小皿（第4図－1）は全面施釉で，中央公論社刊，日本陶磁全集，瀬戸，美濃の原色図版98・99（笠原町妙土窯出土）と同系である。口縁は外反していない。〔第4図版－1〕

輪花小皿（第4図－5）は口縁部を指で一寸つまんだ程度のものである。釉は焼け不足の飴釉破片二ケのみ出土。〔第4図版－5〕

短檠（たんけい）皿（第4図－6・7）つくりは茶入等の蓋のつまみのないものと同様である。底は無雑作な糸切りのままであり，鉄釉の全面施釉である。人に教えられて灯明皿であると信じて来たが容量等から疑問がある。あるいはつまみの無い蓋かも知れない。〔第4図版－6・7〕

古唐津皿（第4図－8）東灰原から他の遺物と一諸に出土した珍らしいものである。この窯で焼かれたものではなく，九州の唐津岸嶽古窯系のものと推定する。素胎は黄赤色であり，割合こまやかな砂目である。三日月高台で，内部はぞんざいに削ってある。高台脇はごく形式的にひとカンナ入れたのみ。その高台は著しくすり減り長期間使用された事を物語る。釉は黄緑色の灰釉で，共土の大きな目跡が二つ残っている。〔第4図版－8〕

3．香炉（第5図－1～3）〔第4図版－19・20，第12図版－8〕

香炉はこの戸長里窯で最大の特徴を有するものの一つである。それは織部緑釉，朝鮮唐津釉の存在である。種類は飴釉，朝鮮唐津掛分，織部緑釉と飴釉の掛分等で高台も三足，輪高台，又輪高台と三足同時に有するもの等である。型はほとんど中型のもので普通のと平型がある。

飴釉香炉（第5図－1）は筒形三足の中型で口縁端部を外に強く折り返している。足から口縁部まで複元出来る唯一のものである。〔第12図版－8〕

朝鮮唐津掛分香炉，口縁端部から胴部にかけてひどくゆがんだ折り縁のものがあり，又内に白釉足に鉄釉の掛かった同類の破片から前述飴釉と同じ型の香炉であろう。朝鮮唐津破片

内部と外口縁端折返しから1cmの所まで藁白釉それから下が飴釉の掛分けで，胎土内部からの硫化鉄のふき出しから白釉が青味を帯びたナダレとなり美しい景色を作っている。白釉は完成されている。織部緑釉，飴釉掛分平香炉（第5図－2）割合大きめの平型輪高台のものである。口部折縁から内に織部緑釉が掛けてある。又轆轤目が右下から大きく左上に走っている。これは右回りで素早くひかれている事を物語る。折り目から口縁端下まで透明の釉で素胎がすけて見える。当初緑釉がすべり落ちたものと見ていたが，銅分が全く残っていないし，よく見ると長石まさりの安定した透明釉である。つまり三種類の釉薬の掛分けという事になる。〔第4図版－20〕

朝鮮唐津袴腰香炉（第5図－3）口縁部は出土していないが折縁の香炉だろう。内側から胴下部，腰部に至るくびれまでが白釉，それから下，高台内までが鉄釉である。輪高台で畳着のみ釉が剝いである。袴腰香炉の出土は一点のみである。〔第4図版－19〕

飴釉平香炉折縁を持たないやや内傾し口縁端の丸い筒型の平香炉である。釉は古瀬戸調飴釉，三足と同時に輪高台を持つものである。底は輪高台の畳着まで釉が掛かりかろうじて三足の存在が判る。

4．鉢類（第5図－11～12）・（第6図1～9）・〔第5図版6～11〕・〔第6図版－1～7〕・〔第8図版－1〕

香炉同様に器形，釉種に変化のあるもので中鉢のみをこの項に入れる。織部緑釉を筆頭に飴釉，飴釉との掛分と釉種も多く器形も色々ある。高台はすべて輪高台である。

注目すべきは総織部釉で中国民器の形を模したと云われている面盆形（第6図－1）の出現である。彫り絵を除けば，至文堂刊，文化庁監修・日本の美術8，No51志野と織部，P80.145図，総織部草花模様向付の形に直結する。それは底からの立ちあがりの所に一線を引き，斜め上に急角度で立ちあがり，折縁に至る。角鋭くコテで調整し，わずかのふくらみを持たせ線をひき，その間をコテで押え口縁端に至る3mm手前で線をひき，又，盛り上らせて角ばった先端を作っている。折縁の幅はせまい。中国，金白磁の鉢や元染付大皿等の口縁部のつくりとも共通する。表面を均すのに〝木ゴテ〟の直線面を使ったらしく，だるのをささえるためか折り角の裏側をささえた指の跡がミゾになり深く残っている。胴部のそこまで削りが入いり桃果紅調の緑色に発色している。飴釉折縁中鉢（第5図－12）も折縁の幅がやや広いだけで同様のつくりである。又飴釉の丸底折縁中鉢（第5図－11）もやや深めで底が丸い事以外は同じである。ただ重ね焼した跡が口縁部，胴中央部についている。銅緑釉と飴釉の掛分鉢（第6図－2）も厚手で多少深めだが同様のつくりである。口部に銅分が残っているが，折り目から内に5mm程の所から先端部下角までが香炉の例と同じように，長石まさりの透明

釉とも考えられる。三種掛分けか。

総織部中深鉢（第６図－５）高台脇は面取様に削り，腰部は丸く急なたちあがりを見せる深め中鉢。ぶ厚い作りで口縁端部は角を持ち１cm程斜めにつままれ４mm程の厚さでわずかに外に突出した端反りのものである。緑釉は薄く素胎に吸収されている所もある。

柿釉中鉢（第４図版－21）は高火度のためひどくゆがみ，三枚重ねで窯道具と共に半形のものが出土している。皿とも鉢とも断定出来ない。高台畳着まで釉が掛けられているが，そのすぐ内側の釉を剝ぎ，径１cm程の紐状の粘土輪に円錐ピンがつけられた窯道具で重ね焼している様子が解る。飴釉平樽形中鉢（第６図－９）この窯では粘土紐を器側に平たく貼つけ，斜めにヘラ目を入れ緑釉を塗り，青竹の〝タガ〟を摸したものが大小数点出ている。この鉢は戸長里窯の製品としては肉薄の丁寧な作りで，高台上部すぐの所からこの二本の〝タガ〟がめぐっている。断口を見ると上部になるに従い急に厚くなる事から，黒漆塗の浅桶を写実的に摸したものであろう。釉は黄色でカサカサしている未だ熔けない飴釉である。素直な飴釉丸鉢（第３図－７）様のものもある。口部はすんなりすぼんだ丸縁である。又総織部中鉢（第６図－４）は一見鉢風だが明らかに折縁鉢の少ない折のもの底は輪高台。

5．小鉢（第４図－11・12）・〔第４図版－11・12〕

向附とも云える器高の低い小鉢類である。しかしすべて鉄釉である。

端反り小鉢（第４図－11）は器高一寸ぐらい，碁笥底で高台内は浅めに削られ，畳着は狭く，脇は丸ガンナ的もので調整されている。畳着，高台内露胎である。

又，上記と同様だが，さらに浅くさらに強い端反りのものもある。腰部まで釉はぎ。

器高が4.5cm程のたちあがりが急で径が一回り小振りの端反りの小片も出土している。鉄釉四方小鉢が匣鉢にくっ着いたまま大小二段重ねて出土している。（第５図－４）四方のへこみは指でわずかにつまんだだけである。鉄釉が施されているが，その姿は前時代の入れ子を彷彿させる。下段の鉢は割合大きく，全面に釉掛けされて居り輪トチンのあたる高台内の部分のみ釉が剝いである。上部小鉢の高台内は露胎で，円錐ピンのあった跡が残っている。

腰に丸みのある小鉢（第４図－12）は底部糸切りのままで，腰には竹弓の跡が残る。水引き後加工されていない姿である。低火度のため釉は剝落しているが，鉄釉が全面施釉されていた事が判る。つくりより灯明皿であるかも知れない。尚，前記と同様，同大で胴紐のあるものもある。

〔第４図版－15～18，第５図版－５・６，第７図版－1･2･4，第８図版－１〕

6．壺，瓶類，（水指）水甕（第４図－15～18）・（第５図－６～10）・（第７図－１）

この類には戸長里窯では稀な赤土が登上する。種類は色々あるがほとんど断片で，器種決

定は推定しなければならない。従って間違いも生じるが容赦してほしい。

◦水指－黄褐釉水指（第５図－８）は，この窯には珍しく薄手の精作である。釉も一歩黄瀬戸に近づいた明るい黄褐色のあがりは，他の出土品と異って見える。口縁部を外にひねり返し，やや外張気味に丁寧で四角に調整してある。口部縁の部分の釉がはいであるのは共蓋の存在があったからか？頸部には二本の沈線が走っているが，同所の内部がへこんでいる事から紐に見せようとしたと判断する。その線のすぐ下からふくらんでゆく気配を見せている。一見美濃伊賀の雰囲気を持つ。又，固く焼き締まる赤土で作られた水指らしきものが二種出土している。ひとつは口部を一度外にひねり返し，さらに内に曲げ，口縁上部を厚く平にならし釉を剝いである。頸には二本の突線があり，又肩には１cm程の紐が走りさらにその中央に一本の突線を引いている。つくりは一度輪積みをし，へらで均した後，轆轤調整されたもので，白土の瀬戸系のものと技法，雰囲気も異なり，むしろ出光美術館十周年記念図録，図版153，藤の川内耳付水指との共通性が伺える。(第６図－14)釉は熔けていないが飴釉であろう。

土，つくりは上記と同じく，口縁部の作りも同じ，朝顔形広口の水指（第６図－15）である。頸部に一本，さらに胴部にも一本の紐が走っている。釉は剝落したものか，あるいは南蛮手のようなものか判然としない。同様のものと思える底部（第６図－16）も出土している。

鉄釉桶形水指（第６図－10）非常に厚手のつくりで，胴紐は青竹のタガを摸したもので下部高台近くにも同様の紐がめぐっていると考えられる。黒い鉄釉に銅緑釉の紐のヘラ押しは，黒漆塗桶に青竹のタガの美しさを狙った置水指であろう。

◦小壺類（茶入）

茶入と断定出来るものが二片のみ出土している。一つは焼成時落下し他の匣鉢にひどくゆがんで熔着している。幸いに口部～胴部分が残り，その上手な口造りと，この窯としては極薄手の精作で，内部に釉掛けされていない点等で，同大の小壺類と全く趣を異にしている。

肩が丸い事，口造りのひねり返しの終部が内側にきっちりまとめられている点が，徳川，根津両美術館発行，古瀬戸，図版113と酷似している。又，釉が剝落しているが上記のつくりと全く同じもの（第４図－17）を確認している，口縁部を欠いているが肩から丸く内下へと入り込み再び立ちあがりの気配を見せている。これを，中央公論社刊，日本陶磁全集の瀬戸・美濃，原色図版71，瀬戸鉄釉茶入と同型だと推定しているが，大海茶入の可能性もある。

短頸小壺（第７図版－８）の口縁部から胴にかけてのものが数片見られる。やや偏平のもので，鉄釉，飴釉がある。ごく小さな注口部分も確認されており，水滴とも考えられる。口縁端はそり返っていない。

土瓶大の鉄釉短頸壺（第４図－15）は合致する二片があるが，頸下８mmのところにわずか

の突起が認められ，その割れ口から胎土が続いている事が判る。双耳の一部と考える。双耳水注であろう。又，出土している大きい方の蓋（第4図9A－B）の口径とほぼ一致する。（第4図－16）は前記に較べ器高は低くなっているが，胎土が火に弱いためにゆがんだもので，これも前述と同じ双耳水注と推定している。釉は灰釉でこの窯では非常に珍らしい。尚内部は鋼緑釉で上部での掛分けも考えられる。

鉄釉水注（第5図－6～7）肩が広く細首で，口部に向けすぐ朝顔状に広がる壺の肩から頸部が二片出土している。古瀬戸に祖形を求めれば，鉄釉の水注であろう，又口頸上部を丸くまとめ口縁部を薄めにやや端反り気味にしたもの（第4図－18）はそれらの口部と考えられる。

◦鉄釉広口壺（第5図－9）の口縁から肩，又やや薄手で口縁を欠いた（第5図－10）も見られるが後者はもっと口が小さい気がする。又，（壺片）で腰上部のところに逆さにして釉がひしゃく掛けされたのが判るが，これは形式から云って四耳茶壺（ルソン壺）と推定する。

◦水褄（第7図－1）非常に大きな水褄の口縁から肩にかけてのもの二片出土している。又，同様の褄の胴部のつなぎ部分の補強と考える縄状(粘土紐を平たく押しつけ更にコテで押す)のついた褄胴部（第7図－4）は紐造り，輪積み，コテ均し轆轤仕上げで，その胴紐部分裏は縦に強くすり押された指紋跡が残り密着させようとした意向が伺える。

7．擂鉢，片口，筒鉢（第6図－11～13，第8図－1～7）・〔第7図版－3・5～8，第6図版－8，第12図版－1～4〕

擂鉢は，出土製品の中で最も多く，形も大中小，口縁部のつくりも様々である。又それらには申し訳け程度の片口がつけてある。櫛目は底部から口部へと，無雑作に，十本前後ひかれている。櫛の目の数は7本～11本ぐらいである。又，出土している最大のもの（第8図－1）の櫛目は底から二段にひいてあり，すき間のないくらい多くの櫛目がひいてある。片口は外に二指を添え，内側幅三cmぐらいを下外から内上へ左右から，口下の縁を消しながら，わずかに外へ押し出しただけである。釉は薄い色の鉄釉で外側は松ゴテのようなもので胴部を調整し，底は糸切りのままで，轆轤から引き離す際の竹弓の跡がくっきりついている。口縁部は内部より段をもちそれより1cm程斜めに断面がかどばらない三角形状につくってある。他は多種多様なので説明図で理解してほしい。変り種として赤土（第6図－17）の存在がある。これはずんぐりした白土のものと違い薄手で，口も端反り気味，口縁端部もゆるい隆起から稜をもち，指一本ぐっと押しつけたミゾをもって両端のとがった丸山形の縁となる。又，櫛目も右側が深く強めにひかれ，間隔も整然としていて神経質な感じを受ける。低火度のため釉は剝落している。外側の轆轤目もきわだっている。

◦片口（第6図－13）は，匣鉢に片口を加工し施釉したものである。底は糸切りそのままのものが多いが，まれに碁笥底（第6図－11）もある。匣鉢転用の筒鉢も同様である。又それらの内底は丸く釉が剝いであり，又口縁も拭去してある。粘土輪が土に乗っているが，これは重ねられた事を意味し，内部の平行した器物のくっつき跡は同時に匣鉢としての機能も果している事を物語る。半球形は確認されていない。1の84年度，高根山古窯跡群，発掘調査概報，P11，第14図奥の沢地区出土遺物(3)の片口と類似。

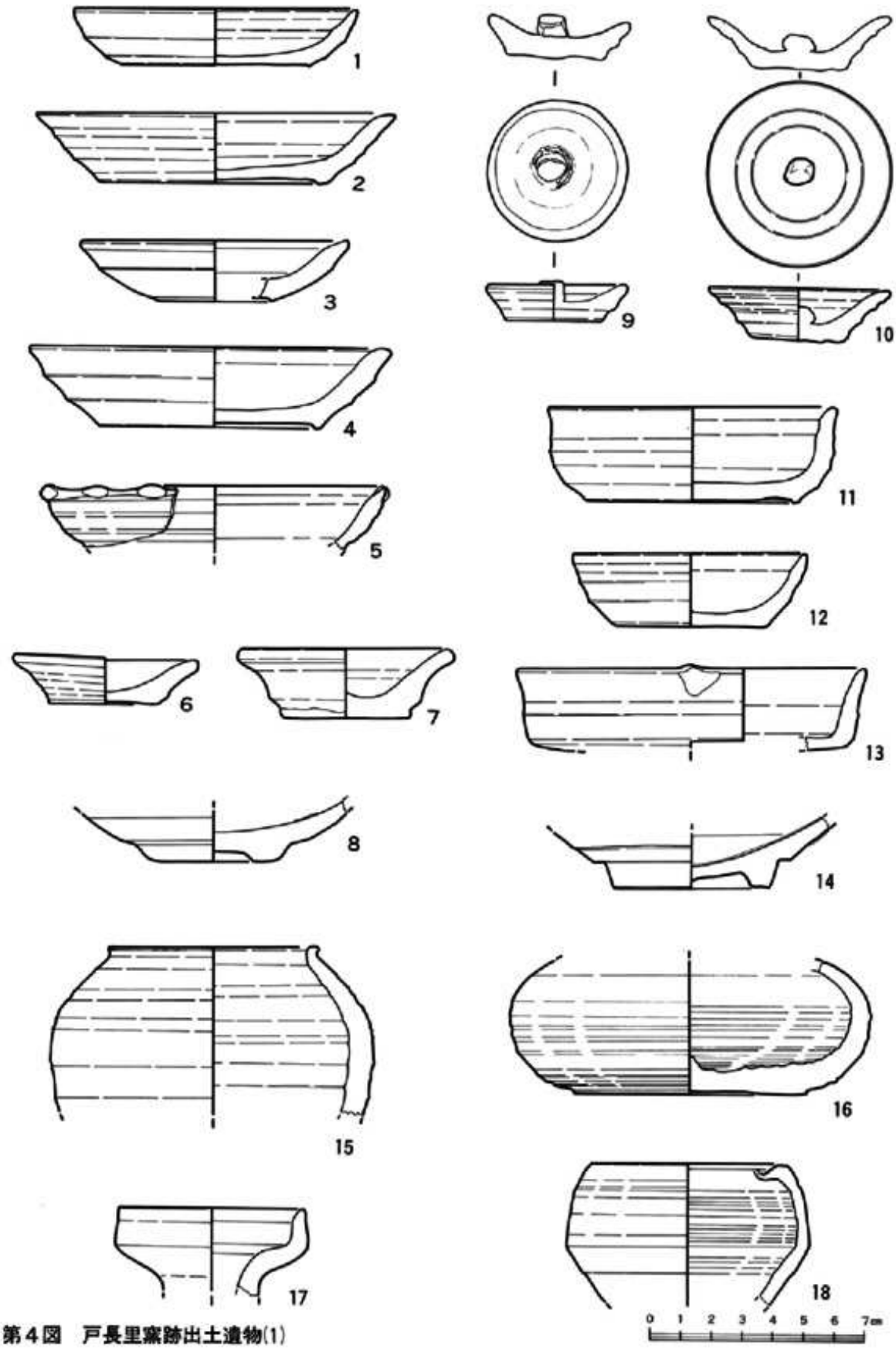
8．土風炉（盤）（第7図－2～8）・〔第9図版－1～5，第10図版1～5〕

土風炉は口縁部がすんなりと平なもの（第7図－5）内側に折り返し上部を水平に木ゴテで均したもの（第7図－6）丸みをおびた胴部から，口縁端2cmぐらいに至りまろやかに内屈し，1cmの斜めな口縁を持つもの（第7図－6）がある。出土している量は二番目のものが多い。

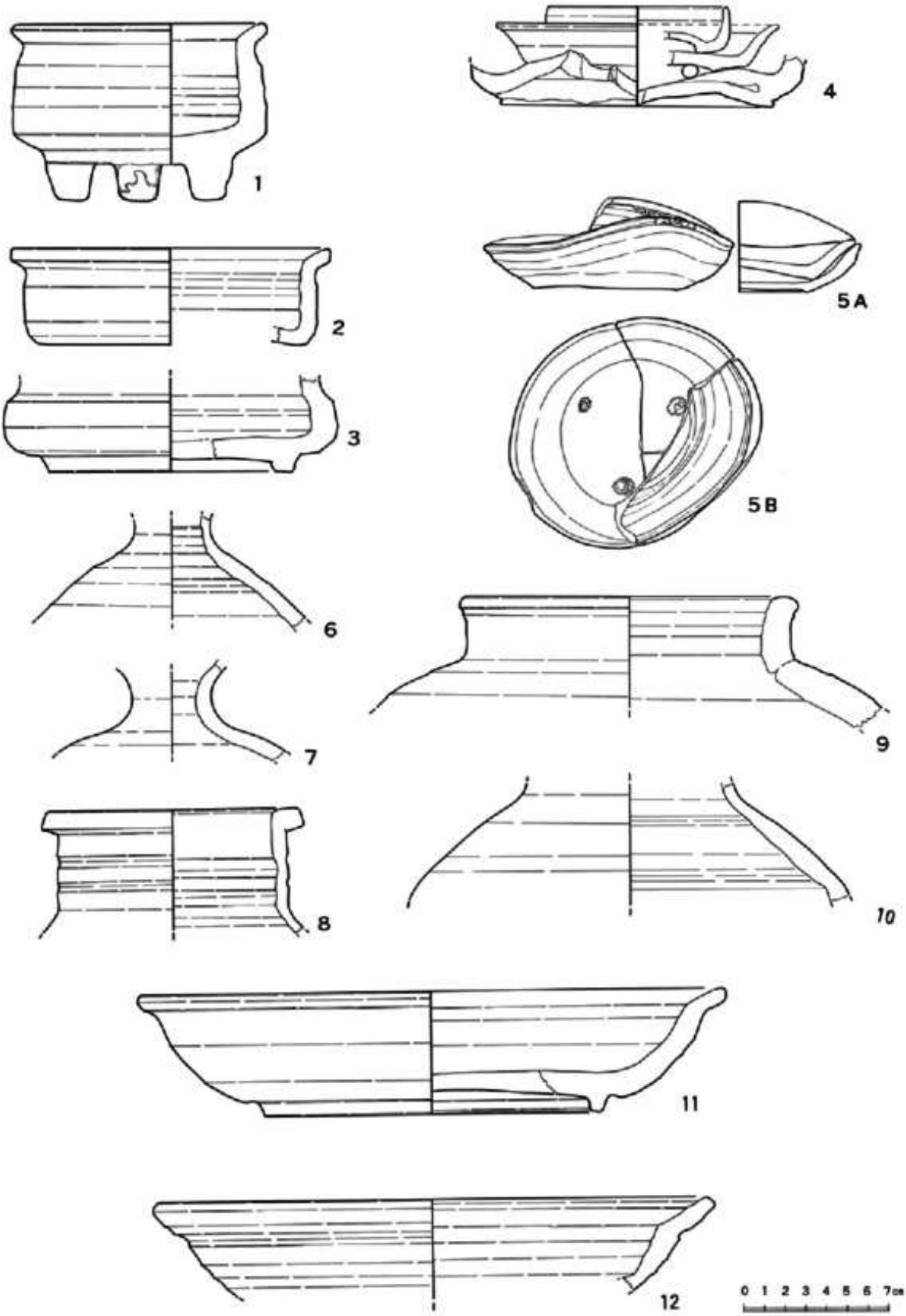
早くから出土していたが，当初大型の匣鉢と考えていた。しかし匣鉢にしては口造りが精巧である事，またすべて焼きが甘いという点等で悩んでいた。この窯の製品は生掛けで素焼のままはこれらを除いて匣鉢，窯道具の他は数片に過ぎないし，その数片にしても焼きが甘いため釉薬が剝落したものである。ただ底面に足（第7図－8）の三足の出土により，茶道用土風炉と確信する。また真塗（黒漆塗）土風炉の素地とも考える。残念ながら土風炉正面の開口部はまだ確認されていない。他に同大ながら端反りのもの（第7図－2），（第7図－3）がある。折り縁角，本体とも丁寧に仕上げられている。これらも土風炉の一形態かと考えるが，そのうちの一つが表面で湿気の多い所にあったためコケむしたか，カビか釉の熔けないものか判然としないものか全面に付着している。徳川，根津両美術館発行，古瀬戸図版83灰釉四足端反盤の推移したものとの可能性を残している。また同大と思える釉薬の熔けていない底部はこれらのものか前述の大型水甕の底部にあたるものだろうか。

9．窯材，窯道具（第8図－8～11），〔第11図版－1～3・6，第12図版－5～7，第13図版－1～15〕

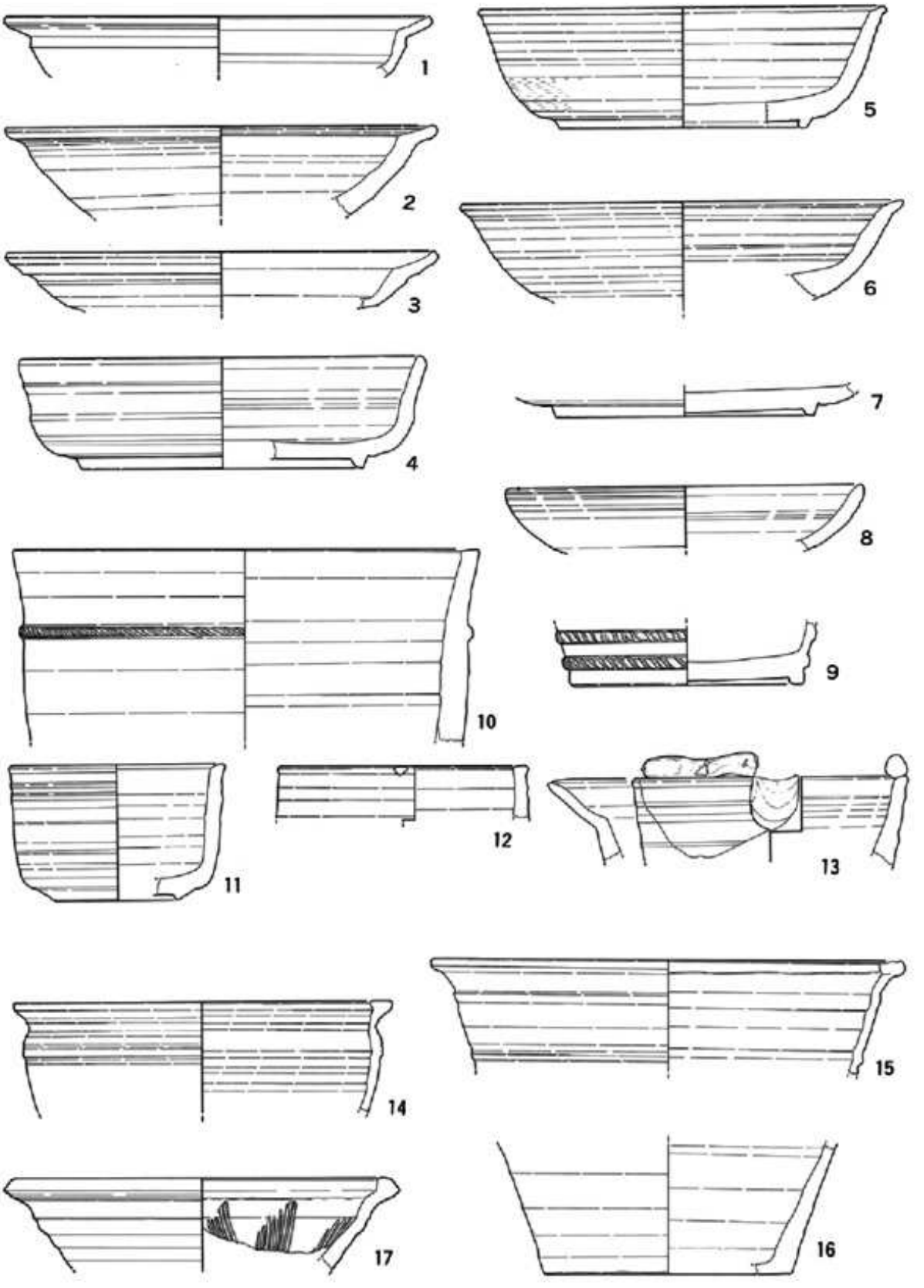
窯材は窯体に残る角支柱，小分焔柱，焼台，馬蹄形焼台，握手跡焼台（名称不明なので便宜上の仮名）（第13図版－1～3）である。使用法をその状況からのべてみる。特に大きなものを焼く時に使用する。まず穴窯底部の斜面に合わせ腕太太長めの焼台を数個置く，その上にあらかじめ器物底の端部に合わせた太い粘土紐の輪を乗せ，その上に器物をすえる。水平になるように低い部分の焼台をギュッと握るとその部分がのびて上る。つまり握る事によってジャッキのような働きをするのである。焼台には生々しい手の握り跡が残り指紋までが残る。(焼台は生粘土である)もし美濃の窯にこのようなものが出土すれば照合が可能と考える。



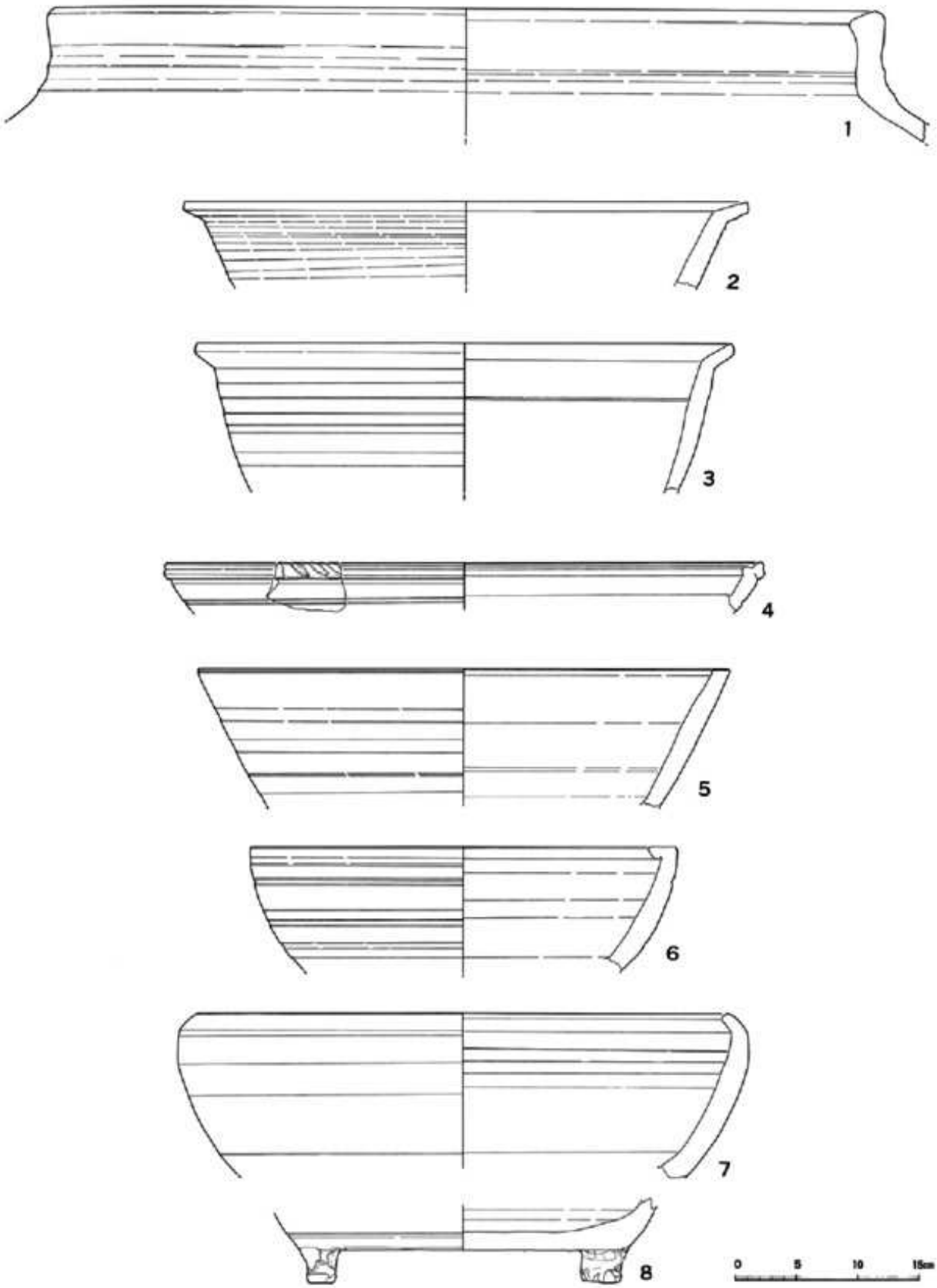
第4図　戸長里窯跡出土遺物(1)



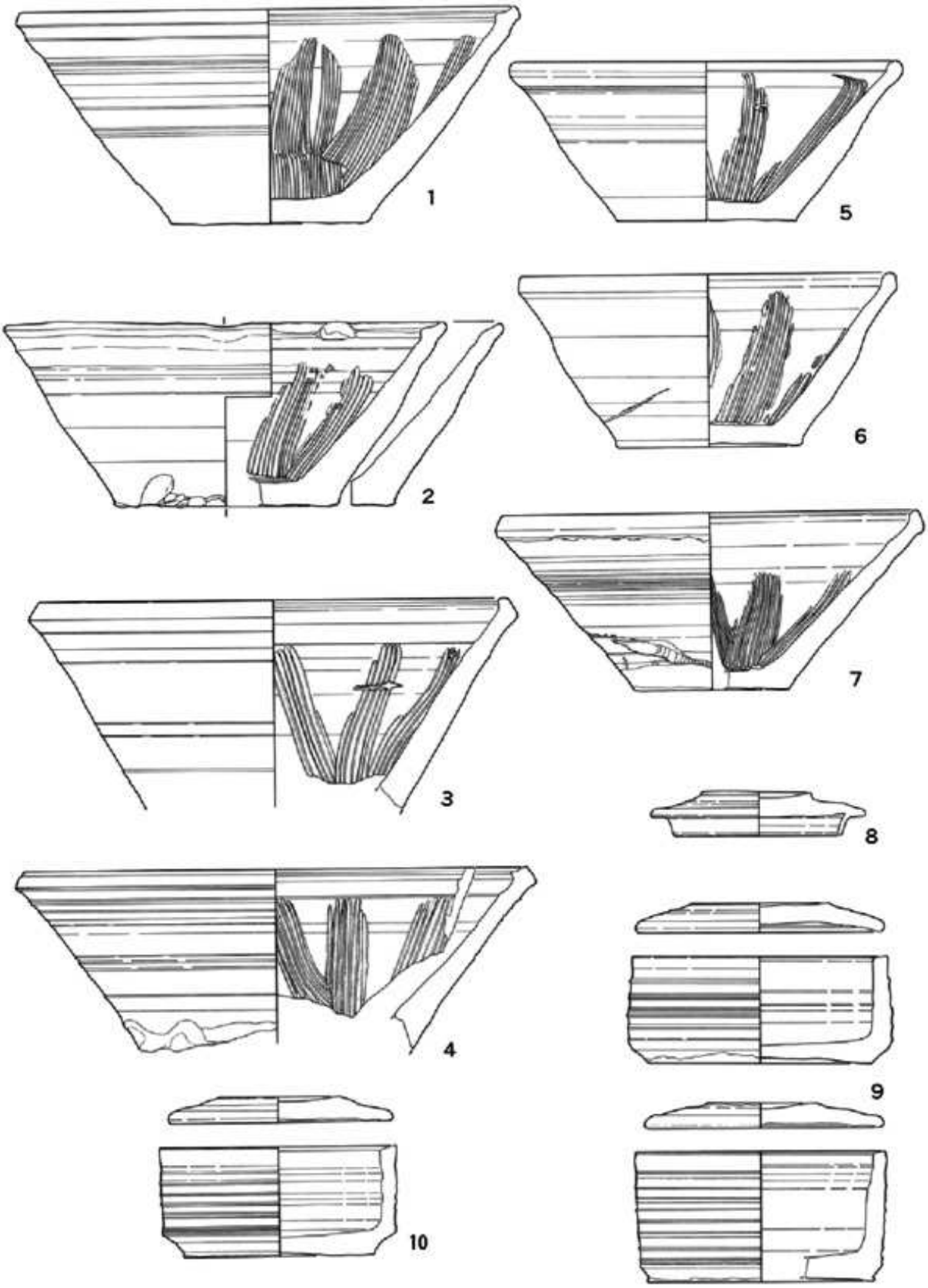
第5図　戸長里窯跡出土遺物(2)



第6図　戸長里窯跡出土遺物(3)



第7図　戸長里窯跡出土遺物(4)



第8図　戸長里窯跡出土遺物(5)

窯道具，匣鉢は現在までの出土ではすべて平底である。高低差はあるが太さはほぼ同じである。低めのは小皿用が多い。エブタは皿状に造った糸切りのものと上下糸切りがある。また擂鉢の重ね道具として〝鬼の角トチン〟（第13図版－15）がある。これも仮名で底部用，上部脇は〝土ダンゴ〟（仮名）（第13図版－７～９）である。中鉢の重ね焼には，丸い粘土輪に円錐ピンを固定したものを使用している。使用された器の内底には五徳目が残る。一番下は紐輪のみ。又小皿用には円錐ピンである。（水野　哲）

7）まとめ

この戸長里窯においてまず第一に朝鮮唐津，織部緑釉の存在は特筆すべきもので，次に掛分けの出現である。私が銅緑釉を説明の項で敢へて織部と言うのは，この緑釉は器種説明で白釉は完成されていると記述していると同様，緑釉はこの戸長里窯に至る前にすでに完成されてたと考えられ，また私達が目にしているのはこの地元米沢の脇の沢白土上の効果を見ている訳で，美濃の白土に掛けられた緑釉を想定し，私は敢へて織部と称した。それに総釉として中国の明器を模した形の器上に掛けられている点からである。次に掛分けについては発展過程ではないかと考える。朝鮮庫津にしても唯一施釉されている香炉の〝つくり〟はあきらかに唐津の蹴轆轤作りでなく瀬戸の流れを汲む手轆轤であり，器形も瀬戸調である。ただ器種説明６水指で述べた赤土の水指のつくり方が朝鮮唐津に酷似している。この素胎と朝鮮唐津掛分けや，ひしゃく掛けの技法がいつ一体化したのであろうか？また本家九州唐津の藤の川内窯に目を転じてみると，朝鮮の唐津焼〝朝鮮唐津〟という固有名詞の冠を頂いているものの，他の唐津諸窯の技法とは違い浮き立った存在に気がつくし，藤の川内窯にはもうすでに長めの織部黒風のヘラ目の入った筒茶入の存在がある。また〝朝鮮唐津〟という言葉は茶道用造語である事に留意したい。つまり，掛分けの技法を発展させる過程で朝鮮唐津の飴釉と藁白釉の掛分けは日本に生まれた。従来の朝鮮の技法は重ね掛けのみではなかったろうか？この東北の窯と九州唐津の藤の川内窯この遠く隔たる双窯にはなんらかの関係むすびつきがある。また，掛分けを過程とするのは，織部緑釉と飴釉掛分け（もしくは間に透明釉の入る三種掛分け）の客観的効果があまり美しく感じられない事である。土岐元屋敷窯を戸長里窯以降と仮定した時，その技法が消滅しているのが根拠となる。それにこの窯の掛分けはほとんどが器高に対して平行の掛分けであり，縦方向の掛分けの製品が一点のみで，ひしゃく掛分けもない事がその裏付けとなる。縦の掛分けは今一寸行方不明だが鉄釉と透明釉のもので気になる存在である。

美濃土岐氏の出身である古田織部は天正年間もうすでに窯ぐれの〝創作技術指導集団〟を傘下に抱えていた。秀吉の小田原攻めで運命的出会いをした二人は意気投合した。同じキリ

シタン系大名である伊達政宗に明春四月に決った京都妙覚寺茶会で豊臣秀吉の注視を得るべき策として奥州出羽の国産の創作陶器をその茶席で実際に使用する事によって秀吉の瞳目を計ったのである。天正十八年七月，早速その友情による窯ぐれの陶工集団はみちのくの片田舎米沢の山中に派遣されたのである。織部の美学者としての面での懐刀的創造芸術家を頭とした築窯士，窯焚士，すご腕の陶工達だった。

先発の伝令により鉱山師達は白土捜しに奔走した。また松の薪も伐られ集められ始めた。同年九月末，十八米余の"独眼竜"の化身のごときその長大な蛇体からモクモクと黒煙は吐き出された。澄みきった長井の庄，西南辺境の地から雷雲のごときに湧きあがった煙は大荒沢の山々や谷々をおおうばかりであった。

これこそは政宗近世の大名茶人としての産声であり，弱冠二十三才の梵天丸"独眼竜"政宗の小田原参陣で出会った秀吉や並み居る戦国諸将に対する不敵な挑戦の咆哮，そして歓喜ののろしでもあった。——九月末に初窯，十月に本番，長雨の十一月は捨て，無理に十二月，そして翌年三月末か四月初旬に一度，妙覚寺茶会まではこれしかチャンスが無い——。この短期間にあれだけ膨大な量の窯道具，そして巣立ったであろう製品の数々を焼き得るであろうかとの疑問がある。否驚くにはあたらない。藤吉郎秀吉の三日普請，洲股築城，信長の桶狭間に代表されるような電光石火，迅速の技なくしては生き抜く事の出来ない戦国，創造エネルギーに満ちた文化の華，走り抜けた時代，桃山時代とはそういう時代なのである。向故，短期間，向故政宗かと……。その一つは山新置賜支社長川口忠夫氏の「政宗はすべて壊して去る」との助言である。なるほどそれを裏付けするかのように。

窯体には掃いたように製品が見あたらず，灰原からは粉々といっていい程復元不能なものばかりが出土する。もう一つの理由は，この戸長里窯に使用されている白土の性質にある。これは鉱山の鉱床に併出する類の粘土である。事実戸長里窯から裏手の脇の沢一キロ米程の所へ土地の小学生に伴われて川床にかけて露出する美しい白土を確認したが，すぐその傍には廃抗が口を開けていた。この白土，単味では1080℃でガスを発してグシャグシャになってしまう金色の硫化鉄の粗粒を含む土である。織部緑釉を焼くのが使命であった陶工には白土が不可欠である。鉄分の多い赤土ではその効果は期待できない。これを陶工達は識っていた。しかし時間がない。政宗は鉱山師達に白土捜しを命じた。そして選定されたのが脇の沢白土であり，最上川支流小樽川左岸の河岸段丘上の平地を有し日の出を拝する東南向きの山腹急斜面の地形に戸長里窯は成った。十分な時間があれば別の陶土を捜し得たはずである。事実私は鉱山系でなく白色の耐火度のある陶土を捜し，黄瀬戸を写した事がある。そこには大正—昭和初期の登り窯が存在した。また，鉱山師の動きを裏打ちするかのごとく天正十八年二

月二十二日，伊達政宗，出羽国長井庄楯山川（今の小野川か）の金鉱採掘を許可した（伊達文書）とある。鉱山捜しにも情熱を傾けていた時期でもあったと思う。私達の想像を絶する動きをする鉱山師の行動は，当然丁度この窯の川向いの山裏に位置する大きな唐戸屋銅山を見逃すはずは無い。この銅山の露頭に美しい緑青を発見し驚喜したに違いない。普通銅緑釉には銅板を腐食させ得られた緑青を処理して使用するが，唐戸屋の緑青が使われた可能性もあるはずである。それから，この窯のすぐ上流の八谷鉱山も発見されたし，それに併出する有名な大峠白土も確認されていたと考えられる。ただ当時はその採掘や精錬技術が伴わなかっただけだと思う。大峠白土，この真白な非常に耐火度の高い陶石は石であるが由，技術のなかったこの時代は陶土として利用されなかったが，戸長里窯の主体粘土である脇の沢土に補強材（耐火用）として砕かれ，混在されているかも知れない。

次に，この戸長里窯からは古い技法である瀬戸・美濃系の彫り絵や印花のない室町的要素を有するものが出る。と同時に，新出の朝鮮唐津や織部にしても盛期時の彫り絵，鉄絵が無く型物やくずしも見られず初期的なものと考えられる。

また，焚口から煙道までが十七米余の急なトンネル様のこの窯跡に立つ時蘇るのが，かつて見た唐津岸嶽古窯・飯胴甕下窯の割竹式登窯と土岐元屋敷の狭くころげ落ちそうな急勾配の登窯である。しかしこの戸長里窯は中程より地上式になるが登窯ではない。窯底は段のない急傾斜面のみで，窯道具は穴窯の馬蹄形焼台に代表される類のものだ。もし文禄慶長の役以降で織部を焼こうとするなら，当然登窯になっている。ましてその頃米沢は千利休七哲の一と云われる蒲生氏郷時代，また氏郷自身文禄・慶長の役では唐津に赴いている。この第一級の武将が築窯しようとする時，はたして前時代的な窯を採用するであろうか。秀吉に恐れられ，会津・仙道・伊達・長井（米沢）を賜ったとは云え，名物の一碗や茶入を喜ぶ氏郷である。ともあれ，結果的には奥州辺境の地に放逐された武将の器量が問われるのではないか……。また米沢を所領としたのは郷安であり，氏郷は四十数里隔てた会津黒川城に居り，何故米沢に窯をという素朴な疑問を生ずる。

再び窯体に戻る。この度の発掘により固定された支柱の存在があきらかになった。それは右寄りに等間隔で上部へと続き，窯体中央部はブルで壊されているがそこにも支柱があったと考えられる。右寄りの固定は，狭い窯では左を作業道としている。長い窯では焚口のみで製品の出し入れをしたとは思えない。窯側の作業口は窯右中央上より灰原や遺物の出土が下方に続いている事が証と考える。まず窯奥より製品を積み，角支柱と反対の左位置に匣鉢その他で同様の支柱をつくる。それを支えとし，小分焔柱や角材等で登窯のサマ穴様にし，その上に陶板，匣鉢で壁様に積み重ねる。差木口の工夫により倒炎式の登窯に近い焼成効果を

あげていたともとれる。製品の10倍程に達する窯材，窯道具，そして異常に多い匣鉢は窯の障壁用にも使用されていた可能性がある。

ここで発掘責任者の手塚孝に登上してもらう。彼は云う「発掘状況により先の築窯に比し左右三寸程づつ窯幅が狭められている」三十数度のきつい勾配，狭い幅，長い窯体，まるで横倒しの太い煙突だ。これは煤のこもらないひきの良い窯，明るく澄んだ美しい緑色，織部青の発色に心を砕き一途に元屋敷窯にと近づいてゆく一過渡期の窯姿ではないか……。また彼は云う「まるで箒で掃かれているようだ！再びの火入れのため窯内は掃除されている」と。窯体内には落ちた天井や側壁，固定された支柱，それに僅かの焼台しか残されていない。分焔柱も取り除かれている。

この窯は自然に衰退していったものではない。再びの火入れを目ざしながら泣く泣く廃窯となったのである。

天正十八年七月前後より築窯が始まり，遅くとも翌十九年八月には廃窯となった。秀吉の命による国替えである。政宗生誕の地，こよなく愛した米沢，この突然の仕打ちに心を残しながらも去らねばならなかった。また陶工達の行方も定かでない。その後の政宗と行動を共にしたか，妙覚寺茶会開催を見届け，美濃に古田織部の元へと帰っていったのだろうか。——セトヤキ，緑ト白ト黒ノカケワケ菓子鉢，真塗の土風炉，白ト黒（朝鮮唐津）ノ香炉，イズレモ奥州デワ産のイマヤキナリ——。このような記述が，妙覚寺茶会記が誰かの日記に確認出来ないものであろうか。

いづれにしても，近代陶の誘致，茶陶の製作，茶道隆盛に並々ならぬ情熱を注いだ窯主の心意気を感じるのである。　　（水野　哲）

8）あとがきにかえて

昭和50(1875)年ころ，山形大学教育学部の考古学資料室に，米沢市戸長里出土の陶器（摺鉢）が持ちこまれた。内地留学においての，地元三沢小学校の先生であった。時代を問われたのだが，まあ室町時代くらいかと答えておいた。その後，この窯から，水野　哲氏の「織部」採集品のあることを知った。55('80)　年近かったろうか。芹沢長介先生と楢崎彰一先生からのお問い合せをいただいたのも同じ頃である。私自身の不勉強と対応の遅さに恥かしい想いである。

地元の方がたの調査希望もあったが，山形県域では，未見の窯でもあると判断されたので，関係者全員のご協力で，保存策を考えながらの調査はどうあればよいかを考えてきた。ようやく，ある見通しが得られたと判断したので，今回，米沢市教育委員会と同市史編纂委員会のご協力によって，予備的調査に踏み切ったのであった。

前節までにその要約が語られているので，とくに要約の必要はあるまい。

「釉」のある土器類はもう分らない私でも，「織部」の魅力だけは感じる。それは，庭園の美しさと重なり合ってもいるからであるにしても，陶磁器自体がもつ迫力である。たとえ，断片でも，「織部」は全体で迫る。水野氏の陶芸家としての底力も，この戸長里窯との出合いにあったと私考している。

もう一年かけて，じっくり調査者同士で分析し，考察し，本調査に当るつもりでいる。予備調査以上のご協力を，今からお願いするものである。

戦国期の置賜の動乱は，これまで文書資料だけで綴られてきた。いま，考古資料をも加えて，より生き生きとそれが語れる時が来たことに喜びを新たにしているところである。会津側でも，中世・近世を通じた陶磁器窯の調査，研究が進んでいると聞いた。それと総合される日も亦遠くないであろう。

（加藤　稔）

図　　版

▲発掘前の状況

▲現地説明会参加者

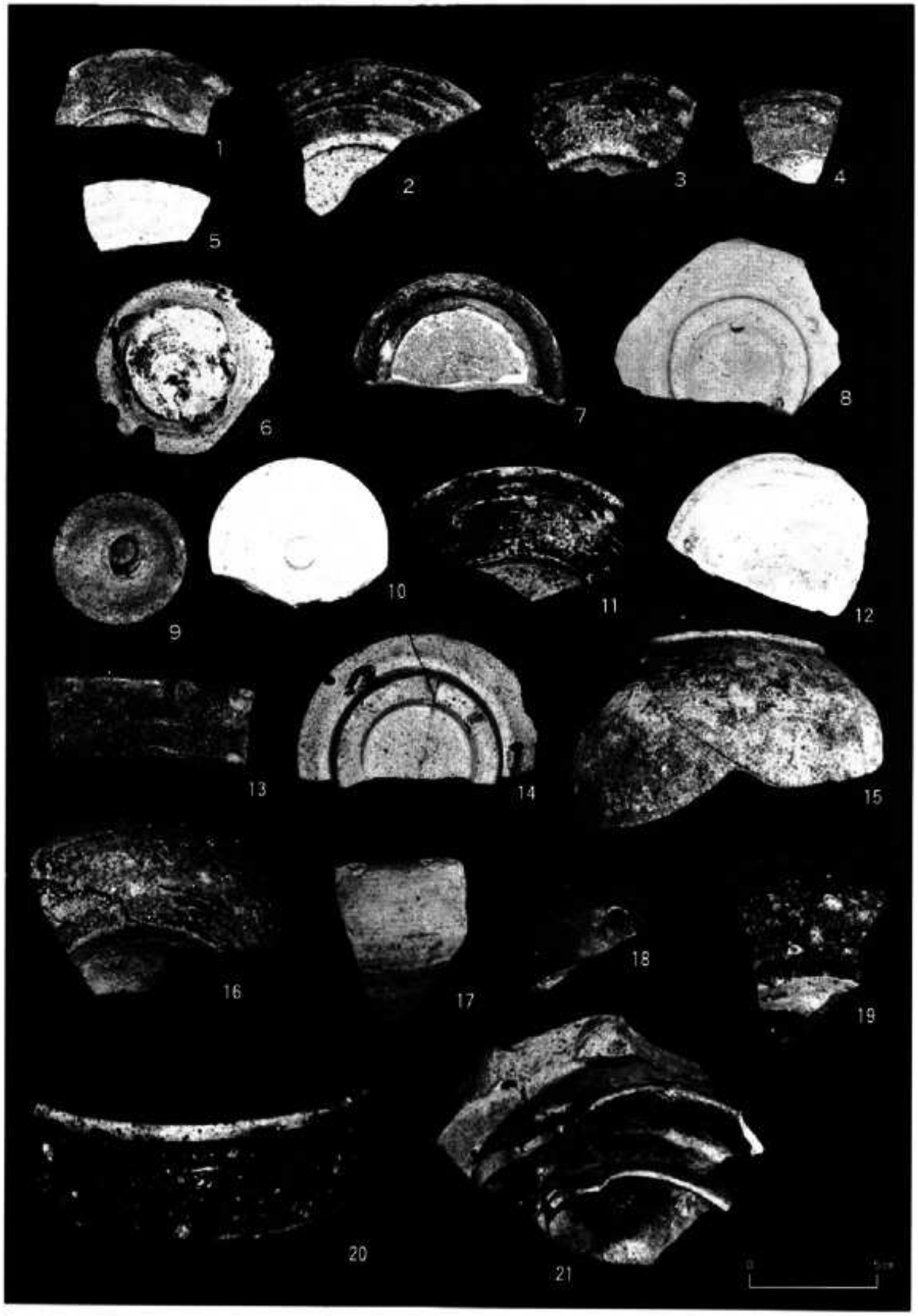
▲窯体焼成室

▲窯体層序と支柱

▲物原窯道具の層序

▲物原窯道具出土状況

第四図版　戸長里窯跡出土陶器(1)

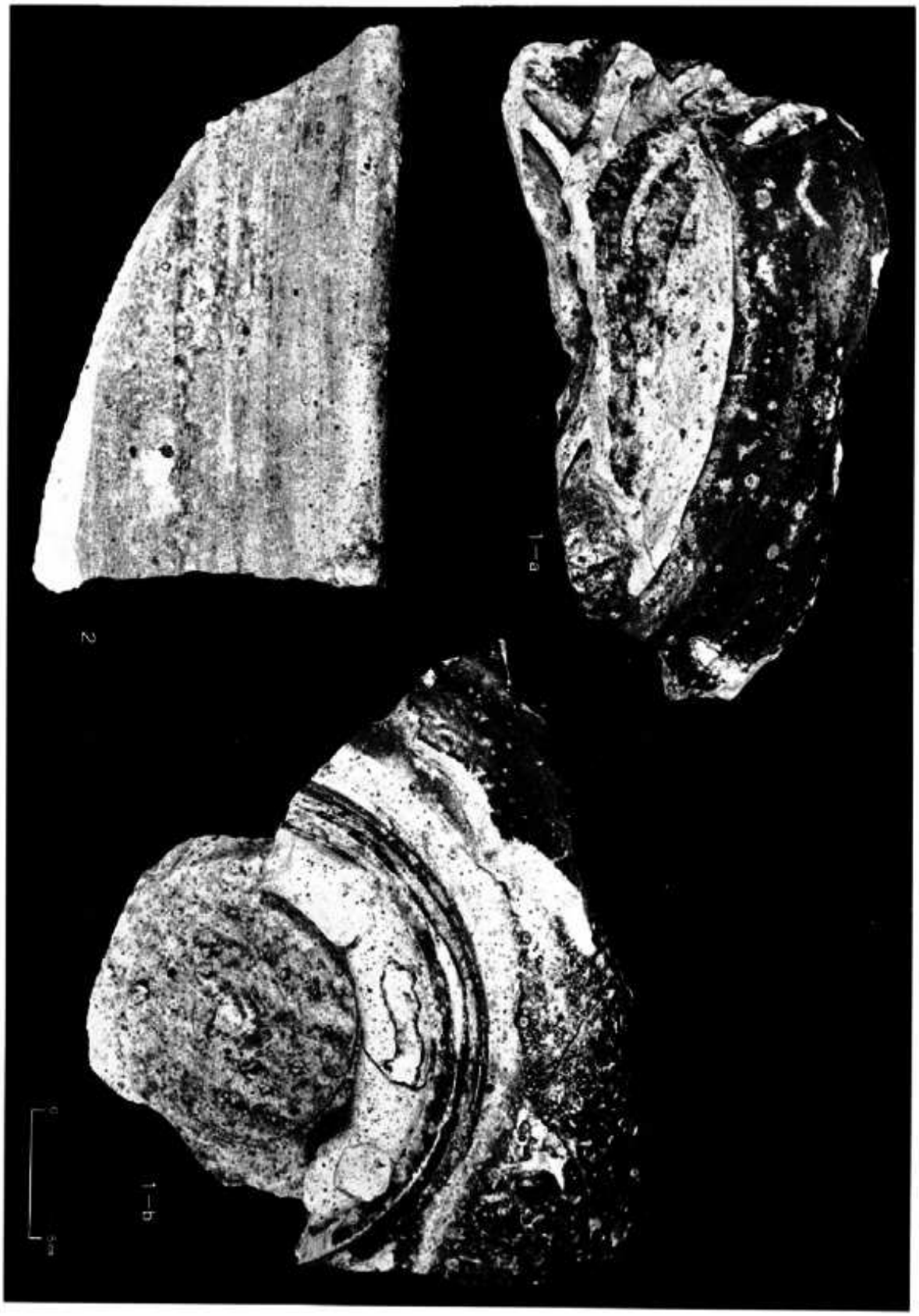


第五図版　戸長里窯跡出土陶器(2)

第六図版　戸長里窯跡出土陶器(3)

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

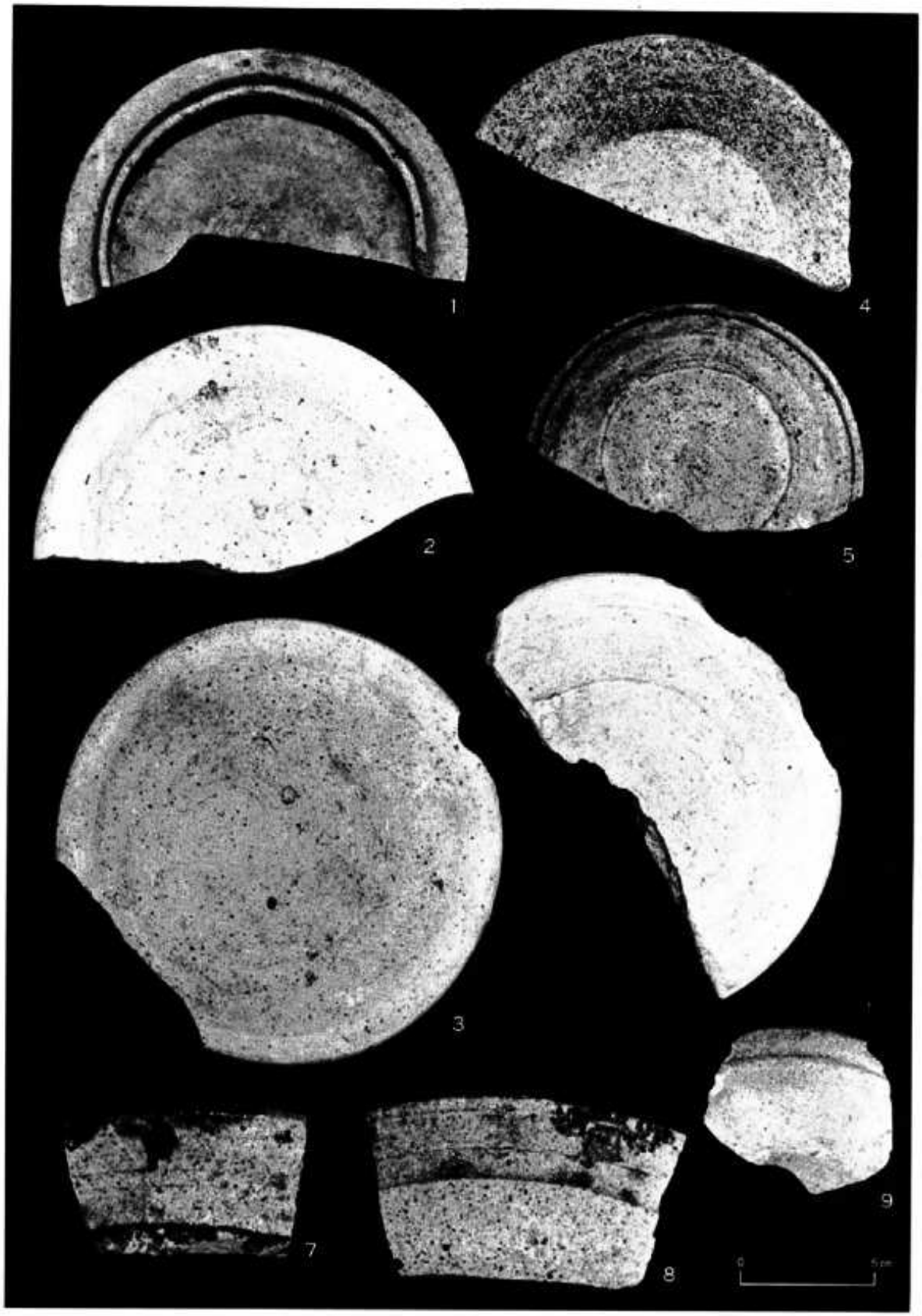
第八図版　戸長里窯跡出土陶器(5)



第九図版　戸長里窯跡出土陶器(6)

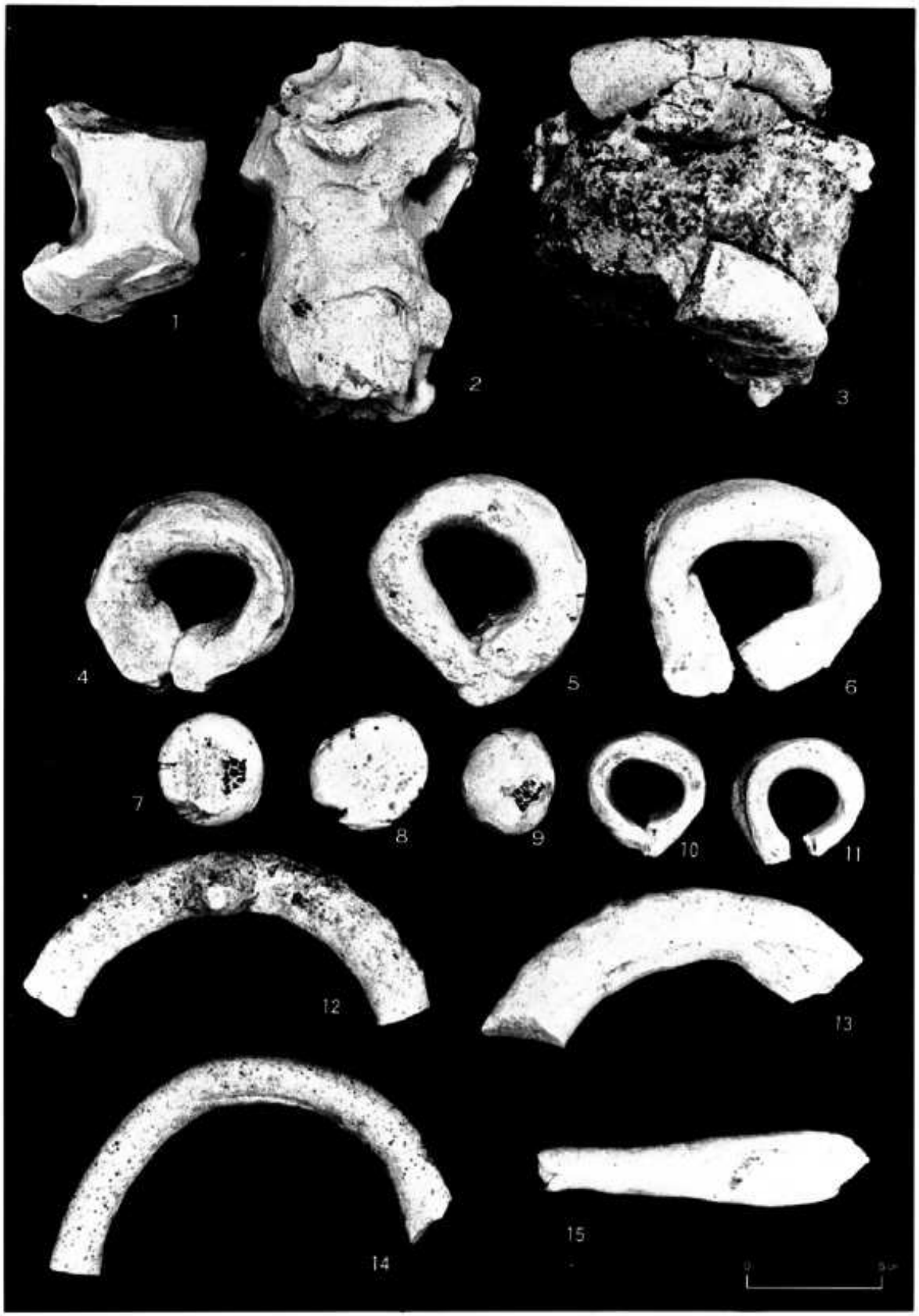
第十図版　戸長里窯跡出土陶器(7)

第十一図版　戸長里窯跡出土陶器(8)



第十二図版　戸長里窯跡出土陶器(9)

第十三図版　戸長里窯跡出土陶器(9)



戸長里窯跡第１次調査報告書

昭和61年３月20日印刷
昭和61年３月31日発行

発行　まんぎり会
〒992-11 米沢市万世町桑山2760－１
菊地政信方

印刷　羽陽印刷所
米沢市中央３丁目９－22